

1. テキスト

「場所」「一」。第一段落。208 頁 3 行目～210 頁 14 行目

2. テキスト要約及び会の進行に於て重要と思われる事柄

①『有るものは何かに於てなければならぬ、然らざれば有るといふことと無いといふこととの区別ができないのである』(208 頁 5 行目) という根本テーゼについて

まず、唐露氏のプロトコルによって現今の認識論についてのラスクの立場の確認を主に石原悠子の「論理的客観主義」の的確な解説により確認した。しかし、西田はこのラスクの立場も「かかる区別の根柢には、唯時間的に移り行く認識作用と之を超越する対象との対立のみが考へられて居ると思ふ。」(208 頁 3 行目) とし、その限界を指摘している。次に冒頭に挙げた根本テーゼ『有るものは何かに於てなければならぬ、然らざれば有るといふことと無いということとの区別ができないのである』ということについて考えて見たい。これは「対象と対象とが互いに相関係し、一体系を成して、自己自身を維持すると云ふにはかかる体系を維持するものが考へられねばならぬと共に、かかる体系をその中に成立せしめ、かかる体系がそれに於てであると云ふべきものが考へられねばならぬ。」(208 頁) ということと同義である。西田はここでその具体的例として「我」と「非我」をそれぞれ「関係の項」と「関係の項」とし、そこには「関係を統一するもの」と「関係が於てあるもの」(おそらく場所であろう)を引き合いに出しそれらを論理的に区別することができる。つまり自らのかんがえる場所を論理的に説明しようとしているのでありそれが可能であるといいたいのだろう。「関係を統一するもの」「関係が於てあるもの」とは「意識現象を内に成立せしめるもの」のことをいうのだろう。ここでの意識現象は「我と非我との対立を内に包み」という矛盾したものである。

自己同一の深き根柢に達すれば達する程、単なる類概念的統一の対象界から矛盾的統一の対象界に移っていく。此統一の徹底に於ては、外に超越的な物を考へ内に類概念を考へる要なく、反省的範疇の対象界と構成的範疇の対象界とが合一して個物的なるものと個物的なるものとの直接の関係のみとなる。(194 頁 4 行目)

我々は先の論文「働くもの」において矛盾的統一の対象界においては特殊と一般の間隙を埋め「個物的なるものと個物的なるものとの直接の関係」の世界に至ることができると再三確認した。これは矛盾的統一の対象界においてのみ我々は個物を掴み得るということである。ここで確認したいのだが、西田にとっての個物とはなにかということである。西田にとっての個物とは、例えば「此の花は赤い」という例における「此の」という唯一性である。

これは厳密に言えば『善の研究』第一章、第四章における「純粹経験」であり、「意識現象」

であり、また「真の我」でもある。(我々は純粹経験そのものである。)そしてこの「瞬間」は(永遠の今)でもある。西田はこの決してつかみ得ない一点の周りをまわりながらそれを掴もうと今矛盾的統一の対象界にいたり、個物を掴まんとする。その緊張感をこの根本テーゼと次に述べる問いに見ることが出来る。

②プラトンの『ティマイオス』を読む。

次に読書会ではプラトンの『ティマイオス』を読んだ。この『ティマイオス』の中でプラトンは「場所」について

「およそあるものはすべて、どこか一定の場所に、一定の空間をしめてあるものでなければならない。地にもなければ、天のどこかにもないようなものは所詮何もないものでなければならない」などと、寝ぼけて主張させる、まさに当のものにほかなりません。

ティマイオス 84頁 6行目

と、辛辣に批判している。つまり「場所」からものを論じることを「寝とぼけ」でしかないとまでし、真実をかたることが出来ないとしている。しかし西田は敢えてこの「場所」から真実在を捉えようとする。

此の如きアイデアを受取るものとも云ふべきものを、プラトンのティマイオスの語に倣うて場所と名づけて置く。無論プラトンの空間とか、受け取る場所とかいふものと、私の場所と名づけるものと同じいと考へるのではない。(209頁1行目)

場所論に対する西田の覚悟がみられる。もちろん西田がプラトンの場所に対する認識を知らなかったとは考えにくい。ならばなぜ寝とぼけとまでいわれた場所から西田は実在を語ろうとしたのか。ということを生先生が問われた。

③第三段落 (210頁5行目～)

次に②における問いを第三段落を見て行く事で考えて見たいと思う。

我々が物事を考へる時、之を映す如き場所といふ如きものがなければならぬ。先づ意識の野といふのをそれと考へることができる。何物かを意識するには、意識の野に映さねばならぬ。而して映された意識現象と映す意識の野とは区別されなければならぬ。

(210頁5行目)

ここで「映された意識現象」と「映す意識の野」とは区別されている。「映された意識現象」つまり対象としての意識現象はなお鏡に映された似像のようなものにほかならない。鏡に自己を映してみるのである。それは例えば合わせ鏡に自己を映すようなもので限りがない。道徳の無限進行のようなものであり我々はそこに解決を求めることはできない。つまり満足することはない。「我々は道徳上完成することは不可能であるからである。」(註1)常に自己をたててそこからしかものを捉えることしかできない。ならばどうするのか。ならば鏡は鏡は割られなければならないだろう。鏡は割られ自分を捨ててすべてをすてて「映す意識の野」つまり直観に至らねばならない。これには「知る」こと。つまり自己が自己に於て自己を見ることがなければならぬ。「自己が自己を見る。」また、「鏡に映す」と

このような記述は『善の研究』においても既にみられた。しかし「自己に於て」というこの一点が場所の生成には必要なのである。「知る」ということにはそれを「知る」場所がひとつようであったのだ。それは鏡ではない。鏡は既に割られてしまった。

自覚の意識の成立するには「自分に於て」といふことが付加せられねばならぬ。知る我と、知られる我と、我が我を知る場所が一つであることが自覚である。(127頁)
知る我と、知られる我、我が我を知る場所が一つである。前述したようにその場所は「矛盾的統一の対象界」であり「個物的なるものと個物的なるものとの直接の関係のみ」が存在する「場所」であり「意識の野」なのである。

④最後に

最後に西田にとって「知る」ということがどういう意味をもっていたかについて少し考えて見たい。この論文「場所」が書かれたのは、前年に長年病臥にあった妻を失い、次々と病に倒れる娘たちの介抱に暮れていたころである。激しい耳鳴りがあったともいう。その実生活の困難さは想像に難くない。

我々が、自分の分裂が本来統一の中に含まれて居ることを知れば罪にはならぬ。(中略)

しかし我々の罪が即ち恩寵であることを知れば罪は真の罪ではなくなる。(註2)

苦しむ自己を自己に於て自己自身が見つめている。その苦しみ分裂は西田の求める本来の統一、真の主客合一には程遠い状態かもしれない。しかしこの分裂、不安、苦しみが本来統一の中に含まれて居りそれはただ程度の差に過ぎない。と自知できるのであれば、その罪は真の罪ではなく恩寵であるという。

救済の本質は一種の真実の知であると思う。あきらめではない。これまで自分の救い主を知らなかったのである。(註3)

西田は知っていた。「知る」ことを。真に「知る」ことによって救われることを。そしてそれは「場所」という形で常に我々に開かれていることを。だからこそ西田はプラトンに抗ってでも「場所」から真実在を語らねばならなかったのではないだろうか。

註1～註3

西田幾多郎講演集「宗教の光における人間」 田中裕編 岩波文庫

3. 哲学的問い

鏡は割られたのだろうか。

プロトコルを書いた後で気付いたのだが、今回のこのプロトコルにおける西田の宗教に対する態度は『善の研究』のそれであると考えられる。その基本的立場は終生変わらなかったとしても「場所」の生成においては何等かの変化があったはずである。鏡が割られたのなら個物に到達し得たのなら、西田はおそらく宗教家になっていたであろうし、「場所」を語る必要性もなかったはずである。この頃の西田が真に知っていたもの。それは鏡はわられることもなく、しかも個物に到達し得ることさえできない。耐えず不安に苛まれ、信仰に至り得ない自己自身そのものだったのではないか。